

出会いから学ぶ

in Cambodia

千葉県立千葉東高等学校 Chisa M.

私は、カンボジアの学校生活や、政府と民間ボランティア団体が行う発展途上国の支援方法とその違いを学びたいと思い、第6回カンボジアスタディツアーに参加しました。スタディツアーの中では、内戦や教育、文化の主に3つの側面からカンボジアについて学びました。ここには、特に、カンボジアの学校生活について学んだこと及びスタディツアーを通じて考えたことを書きたいと思います。

寺子屋に通う学生との交流

カンボジアは、識字率が約78%である発展途上国だと事前学習で調べました。しかし、首都プノンペンには、日中だけでなく夜中も賑やかで、制服姿の学生を見かけることも多く、識字率の低さを感じることはほぼありませんでした。実際、プノンペンの識字率はほぼ100%です。現地のガイドさんは、「みんな高校を卒業できるように頑張っている」とおっしゃっていました。既にカンボジアでは、日本からの支援は必要ではないと思うほどでした。

しかし、そこからバスで6時間ほどかけて行ったシェムリアップでは状況が異なっていました。シェムリアップは、アンコール遺跡があり、観光地となっていますが、まだ貧しい暮らしを送る人が多い町です。プノンペンからの移動途中のバスからは、景色の移り変わりから、カンボジアの都市部と地方の違いを感じることができました。プノンペンの中心部で見られた高層ビルは無くなり、整備されたコンクリートではなく、荒れた土の道が多く見られるようになってきました。



↑ チョクニア寺子屋周辺地域（雨季には水上集落になります）

シェムリアップに到着し、日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所を訪問した際、寺子屋活動について教えていただきました。寺子屋は、識字クラスや復学クラスなど基礎教育へのアクセスとなる支援を行っています。基礎教育が終わったら、希望によっては、上級学校への進学を目指します。年齢や性別、学力に関わらず、より多くの方が寺子屋に通えるようなプログラムを開いています。その後、

私達は 2 軒の寺子屋を訪れました。

まず、チョンクニア寺子屋を訪れました。ここは、カンボジアで1番初めにできた寺子屋で、現在は、事務所から独立して、運営委員の方々によって支えられています。チョンクニア寺子屋は、周辺地域の識字率は、56%から89%に上げるなど、積極的に活動しています。識字クラスなどで勉強を教えるだけでなく、手工業や伝統音楽などの専門技術を教える活動にも力を入れています。それまで遠方まで働きに行かなければならなかった人が、その専門技術を活かして、近所で仕事を持ち、家族全員と一緒に暮らすことができるようになりました。また、地域コミュニティの発展を助ける活動も行って、寺子屋は、学習支援という役割を担うだけでなく、地域の中心となって、活動の幅を広げているのだと感じました。

チョンクニア寺子屋では、専門教育の1つとして、水草であるホテイアオイからバッグなどを作る技術が教えられています。完成したものは、海外に輸出されたり、観光客向けに販売されていたり、その収入は寺子屋を運営する資金にもなっています。

私達は、ホテイアオイのコースター作りを体験しました。私は、実際に職人として働く17歳の女性に教えていただきました。初めにお手本を見せていただいた時は簡単に見えましたが、挑戦してみると……超難しい！教えてもらって、1人でやってみて、間違えて、編んだところをほどいてもらって、の繰り返し。しかし、職人の方は、コースター作りは、とても簡単だとおっしゃっていました。バッグを作るには、慣れている方でも2日間程はかかります。そのバッグには様々なデザインがあり、私も1つ購入しました。容量たっぷり、かわいくとても気に入っています。



(上) ホテイアオイのコースター作り中
(下) 購入したバッグ

次に、リエンダイ寺子屋を訪れました。授業の様子を見学させていただき、その後、復学クラスの学生と折り紙をしたり、クメール語の歌を歌ったりしました。紙飛行機を作り、誰が一番遠くまで飛ばせるかを競うなどして盛り上がりました。教室には、電気はなく、日光の明かりのみで、暗く感じましたが、カンボジアでは普通のことのようです。復学クラスは学校をドロップアウトしてしまった人が対象で、小学校教育課程を2年間に短縮して授業が行われています。通っている学生の年齢も幅広く、私が訪れた際は、11歳から18歳までと一緒に勉強していました。

↓リエンダイ寺子屋でのクメール語の授業の様子



その後は、寺子屋に通う15歳の女子学生Tさんの家庭を訪問しました。そこでは、ヌードル作りを通して、家族の方々と交流しました。彼女は、寺子屋に通うようになって、読書や計算ができるようになったと話してくれました。今は、医者を目指していて、勉強は得意だということでした。一方で、時々寺子屋をやめようかと思うこともあるそうです。その理由は、働いて、祖父母と暮らす弟を学校に通わせたい

からと言っていました。弟が住む地域には寺子屋がないそうです。彼女は、家族の幸せを願い、自分を犠牲にすることを考えていました。

アンコール・トムでは、寺子屋に通う学生が参加する「塗り絵プロジェクト」に私達も参加させていただきました。このプロジェクトは、カンボジアの子ども達が遺跡の大切さを学び、その価値を理解することを目的として行われています。

まず、遺跡の絵が描かれている教科書に、それぞれが絵から感じたことを表現しようと、思い思いの色を使って、塗り絵をしました(「この神様は強いから、赤で塗ってみた」など)。その後は、グループごとにアンコール・トムを回り、教科書に載っている像などを、地図を頼りに検索。目的地に到着したら、学生のうちの1人がその説明文をみんなの前で読み上げてくれました。これを繰り返し、遺跡の知識を深めていきました。

↓「塗り絵プロジェクト」にて



学生との交流は、カンボジアについて考えるときに抱いていた悩みが小さくなる体験でもありました。

それまで、カンボジアは発展途上国で不自由なことが多く娯楽が少ない思いながらも、このように考えることはカンボジアの人々に対して失礼に当たるのではないかという不安な気持ちがありました。そのため、寺子屋訪問直前まで、どのように交流すれば良いのかと悩んでいました。

しかし、実際に寺子屋で交流すると、楽しいことばかりでした。

「一緒に写真を撮ろう！」と誘ったら、指ハートを作ってポーズをとってくれたり、紙飛行機を遠くまで飛ばす対決に本気になったり……。私が折り紙の作り方を忘れて、スマホに保存していた作り方の写真を見ていたら、寺子屋の学生がその写真を見て私より先に完成させたことも(笑)。

これらの交流を通じて、彼らは、生活は違えど、私達日本の高校生と同じことに興味を持つなど、変わらないところがあると気づきました。むしろ、カンボジアの学生は私達と変わらないところの方が多いと思います。そのことを知り、カンボジアの学生ともっと仲良くなりたいという思いが大きくなりました。また、カンボジア人だから、などと難しく考えずに交流することこそが互いの理解に繋がると感じました。

また、カンボジアの方々の優しさもたくさん感じました。アンコール・トムでは、日本人メンバー10人それぞれが、別々の現地学生のグループに入り作業をしました。説明はクメール語で、私は何をするのかかわからず、周りをきょろきょろ見渡していると、隣の男の子が色鉛筆を指さして、「これを使って色を塗るんだよ」というように私の方を見てくれました。日本語はもちろん、英語も通じないので、コミュニケーションをとることは難しいと思っていましたが、ジェスチャーや表情で色々教えてくれて、私は少し安心することができました。遺跡を回る際も、後ろからついていく私に、振り返って合図を送ってくれました。直接声で会話することはありませんでしたが、彼のことは、とても印象に残っています。



↑ 寺子屋で出会った方々と

カンボジアの学生とは、日本語とクメール語の通訳を介して会話をしました。家庭訪問先で出会った T さん(写真左上・右)は別れるときに、「また来てほしい」と言ってくれました。短い時間の訪問の中で、質問をたくさんして、迷惑かと心配していたので、この言葉はとても嬉しかったです。しかし、私は、通訳を介しないと会話ができないことに、もどかしさと悔しさも感じました。だから、クメール語を身に付けてから、また彼女に会いに行き、自分の言葉で話をしたいと強く思いました。

カンボジア滞在中の忘れられない出来事

プノンペンからシェムリアップへの移動途中に、食べ物などが売っている所で休憩しました。たくさんの方がいて、とても賑わっていました。私達は、タランチュラなどの虫を買って食べたりして楽しみました。買い物中、私のすぐそばに1人のおじいさんが立っていることに気づきました。「何か用があるのかな?」と思って、そのおじいさんの方を向くと、彼はこちらをじっと見て、帽子を差し出してきました。帽子の中には、お札が入っていて、私はおじいさんが物乞いだとわかりました。彼は、片足が義足でした。私は、恐怖を感じ、その場を離れました。そのうち、物乞いのおばあさん3、4人に取り囲まれました。その時は、まだプノンペンの都会の雰囲気しか知らなかったもので、私は、カンボジアに物乞いの方がいることに衝撃を受けました。バスに戻ってからは、物乞いの方に恐怖を感じたことに罪悪感を覚え、その時どのような行動をとるべきだったのか考えました。今でも、おじいさんの表情、雰囲気は忘れられません。

おわりに

カンボジアスタディツアーでは、在カンボジア日本国大使館、UNESCO プノンペン事務所、日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所で、カンボジアの現状や問題点、それに対する取り組みの実情を伺うなど、貴重な体験をさせていただきました。過去と現在の両面から、カンボジアのことを深く学ぶことができました。実際に現地を訪れることで、日本では、想像もしていなかった様々なことに気づきました。

以前は、将来は、漠然と国際協力関係の仕事に就いて、発展途上国の役に立ちたいと考えていました。カンボジアで行われている日本の支援というと、貧困層の子どものための支援が多いと想像していました。また、民間のボランティア団体が行う支援は、政府が行う支援に比べ、財政や影響力により、支援を続けることが難しいと考えていました。しかし、スタディツアーを通して、日本は、アンコール遺跡などの修復技術を伝える支援も積極的に行っていると学び、民間が行う支援は、政府が行うものより、現地のニーズに柔軟に対応できるという利点を知りました。支援の多様性を学び、私だっただのような形で国際社会に貢献できるかということについて、今までとは違う視点を持って、考えることができるようになりました。

第6回カンボジアスタディツアーに参加するにあたり、たくさんの方にお世話になりました。最後になりましたが、感謝申し上げます。

今回の経験を今後の活動に繋げるとともに、カンボジアについて、国際協力についての知識をさらに深めていきたいです。